

# 細胞診指導医会 会報



No. 1 Jun 1989

## 細胞診指導医会会報発刊に際して

細胞診指導医会会長 信田重光

懸案であった細胞診指導医会会報が、山田 喬幹事ならびに編集委員各位のご努力により、発刊にこぎつけることができました。小生が指導医会長の重責を担って以来、新指導医の急増に対して、指導医会への出席だけでは指導医会の意義を十分に理解していただけるのか、細胞診専門家としての連帯感を強くするためには何が必要か、また指導医会に欠席した場合送付される議事録だけで、その場の空気を十分理解することができるのか、などということを経験者諸君と相談したうえで会報発刊の案をだしたものである。

細胞診指導医会は、その発足当初より細胞診指導医の職務として、細胞診の実務担当、その実力向上、および細胞診技師の教育指導という理念を中心として、初代天神美夫先生（昭和43年11月～昭和54年12月）より、野田起一郎先生（昭和55年1月～昭和60年12月）、栗原操寿先生（昭和61年1月～昭和62年12月）、そして私（昭和63年1月より）へと会長席が引き継がれてきたものである。

この間、臨床診断面における細胞診の重要性の増大により、細胞検査士の増加に伴う資格更新業務、病理医の細胞診業務への参加者の増加、それに伴う病理学会との話し合いによる認定病理医の指導医試験受験資格上の特例の設定などを行い、今後近々に指導医資格更新のための条件設定、そしてその資格更新業務などと、指導医会の関与する業務が増大し、それに伴って、投票によって選ばれた幹事相互の話し合いにより、それぞれの分担により業務を担当している。そして庶務・会計・学術・渉外の他に指導医あり方委員会（昭和56年5月設定）で指導医に関する総論的な事項を検討し、細胞診検査士資格更新審査委員会（昭和60年1月発足）でその業務を行い、さらに指導医資格更新審査委員会（昭和64年1月発足）でその業務を開始しようとしているところである。

これらの種々の業務の変遷は、そのつど、年2回の指導医会で討議を重ねて現在にいたっているのが、この創刊号では、ここ1、2年の間に新しく指導医になられた先生方に、これまでの指導医会の歩みを理解していただくように、またこれからの号には、そのたびごとの指導医会の議事録では感じられないような雰囲気を表すように、そして会員諸賢の種々の声を反映できるよう編集していただくように、編集委員会をお願いをしている次第である。

本会報の発刊により、会員間の意志の疎通が一層風通しよく行われるよう、また老健法実施に伴う細胞診指導医の責務の増加に対する諸問題がうまく解決できるよう、そしてわが国における臨床細胞診断学の一層の発展に貢献できるよう期待し、会員諸賢のご努力をお願いする次第である。

## 細胞診指導医会発足当時の思い出



佐々木研究所附属杏雲堂病院

天神美夫

今般、細胞診指導医会によりかねて懸案となっていた会報が発行されることになり、誠に喜ばしい。昭和43年11月、広島において行われた第7回本学会秋期大会の折に第1回の指導医会が開催されてより22年の歳月が流れたわけであるが、今回の会報発行に際し発行責任者の山田 喬先生より指導医会発足当時の模様を書くようにいわれ、筆を執ることにした。今より23年前のことであり、記憶が薄れているため正確に記述できないと思われるが、私どもの年代の者でないとこれを書くことはできないし、発足時の苦労や裏話を知っている人も少なくなっていることから、これをお引き受けした次第である。

昭和36年に現在の日本臨床細胞学会の前身である婦人科細胞診談話会が増淵一正先生や水野潤二先生を中心に発足し、やがて病理系、内科系、外科系などの細胞診を行っている方々もこれに加わり、日本臨床細胞学会に発展してきたわけであるが、細胞診に燃えている仲間が集まり、なんとか専門医的資格を学会として出せないものかということになった。細胞診の先駆者である米国では、cytologist, cytotechnologist が制度化されており、細胞診のシステム診断がすでに実施されていた。日本でも臨床検査技師に一定の資格を与え、米国と同様な診断システムを作ることが細胞診の発展にきわめて重要な意味をもつと強く論ぜられるようになり、これが、この問題の重視される基礎となった。

20名前後の若い細胞診の医師が学会の機会などを利用して集まり、議論しているうちに、細胞診の active member 的なものを学会に認めてもらうよう働きかけてみてはどうかということになり、当時の本学会の常任理事である増淵一正先生にお願いした。この時期、本学会の理事は大学教授クラスの方が中心で、細胞診を直接行っている方はほとんどなく、細胞診実務は講師クラスの人が行っていたこともあって、理事会では否決されてしまった。

学会の active member を自認しているわれわれは若

いこともあって、作戦を練り直し、再び挑戦することになった。細胞診の実務を行うためには細胞診専門の技師が必要であること、この技師（細胞検査士）の認定や教育には専門の医師が必要であること、また、これらの医師にも学会による一定の基準に基づく資格が必要であるなどを提案理由の中心におき、再度本学会理事会に増淵一正先生より、その必要性を提唱していただいた。私どもは評議員ではあっても理事は1人もおらず、理事会での雰囲気は知るべくもないが、長い議論の末、当時の会長であった福田 保先生の決断によりこの細胞診指導医制度が承認されたときいている（昭和43年1月）。

その結果、細胞診指導医選定基準などを検討する委員会の委員長に増淵一正先生が就任され、昭和43年3月4日付で、参考資料(1)のような文書が委員あてに発送された。この文書を見ると、細胞診指導医 (FELLOW) となっている。これは、当時の active member の各位が IAC の FELLOW を念頭においていたことの表れであり、感慨無量である。

この委員会では、細胞診指導医たる者は少なくとも、他の医師はもちろんのこと技師諸君からみても実力があると認められるようではなならない、という考え方が主流を占めており、現在学会時に行われているスライドカンファレンスのごときものに出場し、会員の前で批判に耐えうるやり取りを経験した医師の中から選ぶべきであろうという主張が中心となり、さらに、日常実務を行い、教育も実施している人を選出することになった。

指導医選考委員は資料(1)の委員各位であったが、委員会の激論の結果、64名の方が記念すべき第1回の選出による細胞診指導医となられた。指導医番号64までの方であるが、すでに鬼籍に入られた方もあり、当時のはりつめた気持ちを思うと感に耐えない。

第1回目の指導医は、昭和43年11月23日、第7回日本臨床細胞学会秋期大会の昼食時に行われた（資料(2)）。それまで名称は指導医協会（仮称）となっていたが、この学会で指導医会と正式に決定された。世話人は

全国9ブロックより17名が選出され、新たに発足した指導医学会の内容と業務実施要項などの協議を行った。それまでに各専門分野内では交流があったものの、初めて顔を合わせ言葉を交わす、という方も多く、議論のかみ合わない点多々生じた。

この中で当初から問題となったのは、各診療科別の専門領域を指導医名称の前に付けるかどうかの議論だった。指導医は臨床医も多いことから他領域には興味のない方もおられ、なかなか統一見解にいたらなかったが、指導医複数対応で細胞診断の実務、指導、および教育を行っていかうということで一応のコンセンサスが得られた。

昭和44年度からは代表世話人に小生が選出され、指導医希望者の掘り起こしを全国的に呼びかけることになる。指導医希望者は学会主催のスライドカンファレンスに応募するよう、医師全員に強く勧めている。

細胞検査資格認定試験制度も定められ、この運用には指導医が中心的役割を果たすことになった。この制度は多少の変更があるにせよ、今日とほとんど変わらない方式で当初から実施されており、世界に通用する細胞検査士を多く育成したことは指導医学会の大きな業績の一つであろう。

また、昭和44年には指導医認定資格を決定している。これも、その後の多少の変更はあるにせよ、基本的精神は現在の制度に受け継がれている。

昭和45年には細胞診指導医学会会則を制度化し、会員の選挙によって代表幹事を選出、幹事は代表幹事による委嘱、という方式がとられ、この制度は昭和51年度まで続いた。

しかし指導医学会員の急速な増加にともない、1名の代表幹事の選出が困難となり、長い議論の結果、選出方法を改めることになった。指導医全員による投票は同じであるが、上位5、6名を得票数により選出し、幹事を決定、その後、幹事間で代表幹事を選出する方式で、昭和52年度より実施されている。

昭和53年6月より、代表幹事の名称を指導医学会会長と改め、初代会長に小生が選出され、一期2年の任期で昭和54年度まで任にあたった。昭和55～60年は野田起一郎先生が会長をつとめ、昭和61～62年は栗原操寿先生となり、昭和63年度より任期が3年となって信田重光先生が会長に就任した。

昭和50年には指導医の印鑑を山田 喬先生のデザインにより作製し、今日にいたっている。

昭和52年より指導医学会は委員会制度を採用し、選出された幹事が中心となり運営にあたっており、会としての内容を強化してきている。

指導医の役割は細胞診断学の進歩や社会環境により時々刻々に変わりつつあるため、「あり方委員会」を昭和56年5月から発足させ、問題点の本質を掘りさげるようにした。この委員会には比較的若い指導医の感覚をもとめ、現場では声を十分反映できるように心がけている。

昭和56～62年度の委員長には杉森 甫先生があたり、多くの業績をあげている。また昭和63年度よりは柴田偉雄先生が就任している。

指導医学会では細胞検査士資格更新が重要な業務となったため、審査委員会を昭和60年より発足し、初代委員長には信田重光先生、現在は杉森 甫先生がこれを担当している。

細胞診指導医の資格更新も本年度より開始されることになった。

昭和57年老人保健法の制定により細胞診業務が国の実施する検診事業の中で重要な役割を果たすことになった。この細胞診には本学会認定の細胞検査士と細胞診指導医が実務を担当するため、指導医学会の役割はますますその重要性を増す時期を迎えることになる。

昭和43年、指導医制度が発足しわずか64名からスタートした本会も、現在890余名の大きな団体に成長し今日を迎えたわけであるが、会員が増加すればするほど、また多くの問題も生じてくることになる。しかし、発足当初の精神は今日まで十分伝わってきていると確信している。

細胞診指導医学会の役割は、学問の進歩と多様性に対応できるよう配慮するとともに、この会報が新たな出発点となることを期待してやまない。



拝啓

時下益々御清祥の段大慶に存じます。

かねてより、問題となっております細胞診指導医（FELLOW）につきまして、至急会議を開き、選定基準等を討議致したいと思しますので御参集下さいます様、お願い申し上げます。

1. 日時 3月9日（土）午後3時より

1. 場所 パレスホテル

議題

細胞診指導医（FELLOW）に関する件

昭和43年3月4日

委員長 増淵 一 正

委員（順不同、敬称略）

大橋 成一（国立東京第一病院） 金子 仁（国立東京第一病院）

田中 昇（日赤中央病院） 高橋 正宜（中央鉄道病院）

信田 重光（順天堂大） 田嶋 基男（国立がんセンター）

石束 嘉男（厚生中央病院） 水野 潤二（関西医大）

服部 正次（大阪成人病センター） 天神 美夫（癌研）

藤井 純一（癌研）

資料 (1)

前略

指導医を御承諾戴きましたので会長よりの委任状を御送付申し上げます。

尚、指導医につきましては、日本臨床病理学会もこれに賛同され同会会長もこれを認められました。

第1回指導医の会合を左記により開催致しますので、学会御出席の各位は必ず御参集下さい。

尚、会場場所は学会場に掲示致しますので御覧の上、時間も余りありませんので定刻に御参集下さる様特にお願ひ申し上げます。

敬具

記

1. 昭和43年11月23日（土）第7回日本臨床細胞学会秋季大会の昼食時間

1. 議題

(1) 指導医制度のいきさつ及び意義について

日本臨床細胞学会会長 福田 保

常任理事 増淵 一 正

(2) 細胞診技士試験について

日赤中央病院中央検査部部长 田中 昇

(3) 指導医協会（仮称）世話人選出について

(4) 指導医協会名簿作成及び会費（入会費のみ）について

(5) 次回指導医推薦について

(6) その他

昭和43年11月18日

日本臨床細胞学会

指導医各位

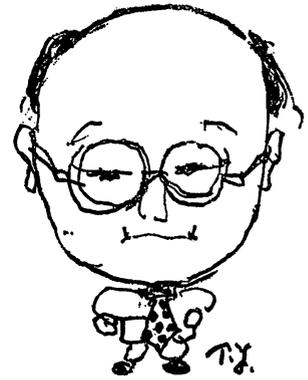
資料 (2)

## 指導医としての私

### —指導医会という名の新幹線—

沼津市カーネギー産婦人科

印 牧 義 孝



最初、東京・新大阪間を走っていた新幹線はいまや博多、盛岡、新潟まで延長され、それに乗ってみて、これほど便利な乗り心地の良い列車はないと国民皆が思うようになった。

指導医会の発展とその効用は、この新幹線のようなものだと思っている。すでに、その会員は899名に達しており、その数からいえば小さい学会並みである。指導医会の先生方は、当然のごとく指導医会の恩恵に浴している。そして誰が、どのようにしてこの会を企画し、組織化したのかについて知ろうともしない昨今である。それはちょうど新幹線に乗っているが、それを誰が発案し、誰がレールを敷き、そして安全に走れるまでに誰が大変苦労したのか知らない人が多いのと同じようなものであろう。

今度、指導医会報を創刊するに当たって天神先生が、この会の発足の経過を書かれるということを知って、まずこのことを考えた。そして、その内容を楽しみにしている。指導医の先生方はすべて、このことを知らねばならないと思うからである。

私は指導医制度のないころから開業医として細胞診を勉強し、苦労して指導医の資格を得た1人であるので、この制度の始めから、見聞きして知っている。そこで、外側からみた指導医会の曙ともいべき内容を断片的に書いてみたい。

私が始めて指導医試験を受けた年は昭和46年であった。それ以前に癌研において増淵先生の指導の下に勉強した後のことである。当時の指導医認定試験はまだ旧制度であり、スライドカンファレンスは、学会員の皆さんの前で1人ずつ問題に対して答えねばならなかった。婦人科の受験者は13名。その問題の1つは誰も正解できなかった。皆会場で顔を赤らめてお互を見廻した。その夜の総懇親会で、受験者は異議を申し立てた。私がリーダーとなり、「こんな試験は難かしすぎる」とT試験委員長に文句をいった。

その答は明瞭、簡単であった。「君たちは細胞検査技

士の上に立って指導する役目を持つことになる。これくらいのことがわからなくては指導医といえるか」と叱られた。そういわれれば皆それ以上何もいえなくなった。

このくやしさが、さらに烈しく勉強するための導火線となった。そして次の年、鹿児島で受け直し、今度は満点で合格することができた(指導医番号136)。

このころ、指導医会の在り方があまりはつきりきまっていなかったように思う。私がまだ指導医の資格を持つ前のことであるが、ある酒席で指導医会設立のメンバーの1人であった某先生が、「指導医制度ができたが、君のような開業医にはこの資格は絶対やらない」といわれた。私は黙っていられない。そこで「癌細胞をみつける実力があるのに、開業医であるという理由で指導医になれないのはおかしい」と怒りを爆発させた。当時、細胞診の教科書も数少ないころであり、開業しながら勉強するのは非常に大変であった。それゆえこの論争はとめどもなく続き迷宮入りとなった。しかし確かに当時、指導医という資格は特に限られたエリートのみと与えられるという考え方は一部にあったように思う。現在では考えられないことである。

指導医になった私は、昭和47年春より指導医会に毎回出席し、正に「連続無欠席、無遅刻」そして毎回発言した。この指導医の発展と、より合理的な運営を願うあまりの発言であり、他意はない。けれどあるいはご迷惑をかけているのではないかと心配しているが、でも見知らぬ人から、「指導医会の名物男」などといわれると悪い気はしない。あるいはそれゆえに、この原稿を依頼されたのではないかとも思ったりする。

指導医とスクリーナーが、行政に対応した、歩調のそろった細胞診を全国的に遂行するためには指導医会は絶対に必要である。指導医個人は1個の細胞であり、その細胞の集塊が有機的に連なることにより、機能のある組織となる。この相互の協調の場こそ指導医会であり、この会が機能することにより、日本で新幹線のごとく超スピードで快調に細胞診業務は続けられて行くものと思う。

## 日本臨床細胞学会細胞診指導医会

■会 長：信田重光

■幹 事：野田起一郎（会計担当）

柴田偉雄（指導医あり方委員長）

杉森 甫（庶務・細胞検査士資格  
更新審査委員長）

天神美夫（渉外担当）

山田 喬（学術担当）

■指導医あり方委員会

委員長：柴田偉雄 委 員：垣花昌彦，加藤治文，桔梗辰三，松田 実，永井 宏，並木恒夫  
難波紘二，野澤志朗，杉下 匡，山片重房，坂井英一

■細胞検査士資格更新審査委員会

委員長：杉森 甫 委 員：福島範子，長谷川寿彦，石束嘉男，杉下 匡，平田守男，池田栄雄

■学術委員会

委員長：山田 喬 委 員：藤井雅彦，垣花昌彦，野澤志朗，上井良夫

### 編 集 後 記

指導医の方々の要望により，この会報が発刊されることになった。この会報は学問的内容を盛り込む場ではなく，指導医の活動に役に立つお互いの情報交換の場であるように意図したものである。たまたま小生が，本会の学術担当委員であったので，編集の職責を果たさせていただき，また編集の委員も在京の指導医の方々のなかから選ばせていただき，ようやくこの創刊号の発行にこぎつけたわけである。

しかし，この会報を始めるに当たり，その内容をいかにしたら充実できるかの見通しがあったわけではなく，また多くの会員の満足が得られるような内容を盛り込める精算があったわけではない。正に見切り発車の状態というのが本音である。

この会報は年2回，日本臨床細胞学会総会と秋期大会の折に発刊を予定している。

今回は創刊号であるので，会長の挨拶とともに天神先生に，この会の創立の由来を書いていただくことになった。指導医制度の創立の由来と，その経過が理解されたことと思われるが，さらに2，3回は歴代の会長から若干異なる角度からこのような記事をお願いし，また指導医あり方委員会の委員長にもお願いし，今日までの活躍を書いていただきたいと思います。

指導医会において，一般の方々の提言や発言には時間的制約があり，また十分に整理した意見をいただくことが必ずしも容易ではないので，会員の方々はこの場をぜひご利用いただきたい。この創刊号において印牧先生に書いていただいたような現場からの意見，感想そして提言などを学会事務局までお送りいただければ幸いである。

（山田 喬）

#### 会報編集委員会

委員長：山田 喬 委 員：藤井 雅彦，垣花 昌彦，野澤 志朗，上井 良夫